

より良い私を見つけるために

音羽中・3 木村 美桜

私は小さいころからずっと自分から何か行動を起こすことが苦手だった。もともと自己アピールができるほどの自信をもっていなかった。指示があっても周りの人たちが先に動くまで絶対に動かなかったし、話し合いの時間では友達の見解を聞くだけで、自分の意見を必ずといっていいほど言わなかった。周りの人たちが当たり前にできていることができないくらい臆病だった。しかし、もともとはここまで自分を閉ざしているわけではなかった。でも小学校低学年のときの出来事がきっかけで臆病な気持ちが大きくなってしまった。

ある日、授業の最初にじゃんけんについての話があった。じゃんけんで使用するグー、チョキ、パーの関係と、その関係から三つの手を物に例えたらどのような物になるかを考えることになった。しばらくたつてから、一人の友達が挙手をして、

「グーが石、チョキがはさみでパーが紙だと思います。」

と言った。それに同感したというように、クラスメイトたちはうなずいた。私もそれに賛成だった。しかし、同時に私は違う考えが脳裏に浮かんできた。それは、グーを消しゴムにしてみるという考えだった。確かに消しゴムは石よりやわらかい。だが、数日前に消しゴムをはさみで小さく切ろうとしたときに、なかなか切れないことがあった。だから私は、紙のように切れるわけではない消しゴムは、石と似た物だと思ったのだ。この考えに共感する人は先ほどの意見より少ないかもしれない。けれど、そう思った理由をしっかりと説明すればわかってくれる人があるかもしれない。私は勇気を出して手を挙げてから、

「チョキとパーはそのまま、グーは消しゴムでもいいけると思います。」

と発言した。しかし、その後の友達の反応は私が求めていたものとは程遠かった。何人かの級友たちが、

「どうして消しゴムなの？簡単に切れちゃうでしょ？それはおかしいと思う。」

と否定されてしまった。私は焦ってしまい、理由を説明しようとしたが、どんどん私を問い詰める声が大きくなっていった。まさかこんなに否定されるとは想定していなかったため、涙が出そうになった。泣きそうになるのをこらえるのに必死で、説明することもできずにその場に立ちつくしていた。この出来事から、自分の意見を信じることができずにいた。そして同時に、他の人と比べて理解するスピードが遅く、自分だけで何かをしようとすると高い確率で失敗してしまうことが多くなった気がした。だから自然に自分の意見を言わないようになってしまったのだ。

中学生になってからも私は変わらなかった。相変わらず短所ばかり目立ってしまうため、たくさんの友達に迷惑をかけてしまっていた。その度に友達に嫌われてしまわないか不安で、どうしても授業中のクラスメイトの視線が気になって仕方がなかったため、学校を休んでしまう日があった。そして、同時に私を心配してくれる親に申し訳なく感じていたので、どうしたらいいのかとずっと悩んでいた。

ある日の夜に、家族とご飯を食べているときに、テレビを見ている父を見た。父は私とは違って頭がよく、いい意味で怖いもの知らずだった。一度決めたことは何があっても突き通す。自分の意見は絶対に曲げない。私のあこがれの姿だった。そんな父に、質問を試みた。

「お父さんは、自分の気持ちを他の人に素直に伝えられる？」
急にそんな事を聞いたものだから、父はきょとんとしていたが、す

ぐに口を開いた。

「もちろん。逆に美桜は言えないの？」
と言われたので、

「うん。だって怖いもん。自分ががんばって考えたことだとしても、他の人に否定される可能性があるでしょ？」

と愚痴をこぼすように伝えた。そうすると、

「何を怖がる必要があるの。別に何とも思わなければいいじゃん。それか、それも相手の立派な意見なんだから、参考にしてみたり、別の見方をしてみたりしたらいいんじゃない？」

と、父は私にアドバイスを与えてくれた。怖がるのではなく、別の見方をしてみたらいい。そう聞いてから、私は今の自分を変える方法が少しわかった気がした。

今日は学校で、今は道德の時間だ。道德には答えがないから、自由に自分の意見を言うことができる。聞いた覚えがある。だが、私の手はなかなか上に挙げられなかった。父からもらったアドバイスを思い出しても、怖いものは怖かった。またあんな空気になってしまったら、今度こそ私は耐えられない。もう諦めてしまおうかという言葉が脳裏によぎった。でも、私はずっとこのままなのは嫌だと思った。私が前に一歩進むためには、苦手なことを克服しようと努力するしかない。今まで苦手なことを避け続けてきたせいで、私はどんどん弱い人になっていたことを自覚し始めた。今の私を変えたい。私は勇気を出して手を挙げた。早速あてられて、私は自分の思うことをありのままに発表した。周りの人はどんな反応をするのだろうか。だが、前のような声は聞こえず、うなずく人が少しいた。予想外で少し驚いたが、私は喜びを隠しきれなかった。なぜなら、しっかりと自分の意見を言うことができたからだ。そうだ。今の私に必要なのはこの瞬間なんだ。

それからの私は、グループワークで自身の意見を素直に伝えられるようになった。すぐに人は変われない。まだ自分には改善すべき

点がたくさん残っている。発言の回数もまだまだ少ない。私はまだ未熟者だ。でも、私はかなり変わった気がする。まだあのときのように否定されたことはない。でも、もしその時がきたら、父のアドバイスをよく思い出すことにした。否定されるのも自分が前に進むために必要な意見だ。怖いならゆっくり、少しずつ前に進めばいい。私はまだ成長できるのだ。そう思えるようになったのは、今の私を強くしてくれた過去の私だ。私はこれからも自分を強くしていきたいと思った。